

第124回講座「震災から立ちあがる岩手の漁業」

田老町漁協の協同組合精神と実践を学ぶ

岩手農民大学は8月25日、震災から立ちあがる岩手の漁業をテーマに第124回講座を盛岡市内で開きました。

渡辺基学長のあいさつに続き、田老町漁業協同組合指導課の畠山昌彦課長が「被災から復興へ—津波で壊滅した漁村を復興するために田老町漁協は何をしたのか」と題して講演しました。

[右写真]講演する畠山さん



畠山課長は、津波による田老地区の壊滅状態を映像をまじえながら報告。958隻あった漁船の9割が津波で流失し養殖施設は全滅、津波前は707名だった漁協組合員が被災などにより96名も減ったことなど、地域も漁協も大きな被害を受けたと述べました。このような中で漁協は「漁業は壊滅した地域に残された数少ない希望」と位置付け、北海道などにでかけて確保した船を漁協が買い取り、アワビ漁では漁師が相乗りし水揚金額は世帯配分（通常は1隻に1人乗り、水揚も採捕した漁師のもの）、漁師が船や漁具を確保する経費の自己負担分は漁協が負担（行政が8/9補助、1/9自己負担。1/9といっても多額なので漁民には大きな負担）などを行ってきたと報告しました。

今後の課題として、居住環境が変わることなどによる就業者減少、風評被害もふくめ福島原発事故による放射能問題（まだ検出されてはいない）、2015年問題（鮭は放流し4年で帰ってくる。2011年放流の稚魚が全滅していないか心配）と話しました。



「万里の長城」と呼ばれていた国内最大級の巨大防潮堤を乗り越え、田老地区をのみこんだ。（写真の右が海。畠山さんが漁協事務所3Fより撮影）



3メートルに成長した養殖ワカメの収穫（今年3月）

真崎ワカメは味だけでなく値段もお得！

種類	価格 (100g)	水戻後の重量	食べる状態 で比べると
真崎ワカメ	398円	300g	132円 (100g)
海外産ワカメ	198円	100g	198円 (100g)

↑表のみ畠山さんの講座資料より転載



再生可能エネルギーと地域づくりへのまなざし

岩手農民大学第 125 回講座（現地）が年 9 月 5 日に開催されました。今回の講座は、「午前の部」と「午後の部」に分かれ、一関市竹山町にある照井土地改良区および一関市大東町大原字に位置する「下内野自治会」の 2 ヶ所において実施されました。

9 月に入ったとはいえ、残暑が厳しい日が続くなか、県南の一関周辺地域は格段に蒸し暑いと感じました。天候に恵まれないにもかかわらず、渡邊学長をはじめ、軽米、滝沢、盛岡、北上、江刺、衣川から合計 13 名が参加しました。事務局の綿密な計画とコーディネートで、関心度の高いタイムリーな内容が盛り込まれた研修会として成功を収めました。

照井土地改良区

「午前の部」は 10 時から 11 時半まで照井土地改良区で行われました。照井土地改良区は県内に 6 つある改良区の 1 つです。近年、農業用水を利用した小規模な水力発電（小水力発電と略称される）に取り組み、東日本大震災後の電力不足および「脱原発」の声が高まる中で、再生可能エネルギーへの関心と期待から脚光を浴びており、



岩手日報やめんこいテレビなどマスコミにも取り上げられています。具体的には、平成 17 年度に照井堰水路を利用した水力発電の調査を開始し、平成 20 年度の NEDO[地域新エネルギー等導入促進事業]に採択されました。平成 21 年度に発電所の建設工事、平成 22 年 5 月 13 日に発電事業が開始されました。当改良区には照井発電所（発電量最大 50 キロワット）と赤萩発電所（同最大 6.4 キロワット）の 2 ヶ所の水力発電所が設置されています。「照井発電所」の場合、発電後は東北電力に売電し、最終的に山形グリーンパワー（株）が買取するという流れになっています。

千葉満総務課長をはじめ、職員 3 名が岩手農民大学の研修資料を事前に用意し、図表を入れて分かりやすく土地改良区の役割と水力発電事業の概要を説明(上写真)したうえで、現場を案内してくれました。穂が黄金色に色づいた水稻の脇に設置された照井発電所では、参加者が熱心に施設を確認しながら質問したり議論したりして、大変勉強になり満足そうな顔を浮かべていました。

県内では、農業用水を利用した小水力発電所が 4 ヶ所あり、上記の照井土地改良区の 2 ヶ所のほかに、一戸町の馬淵川沿岸土地改良区の大志田ダム発電所、八幡平市の明治百年記念公園発電所の取り組みもみられます。照井土地改良区は再生可能エネルギーの「固定価格買取制度」を導入するとともに、水力発電の事業拡大を目指そうとしています。しかし、東北電力に売電するシステムが現存するなかで、地域内の資源を活かし、地産地消のエネルギーの自給を高めるにはまだハードルが高いと、参加者同士で率直に意見交換をしました。再生可能エネルギーを少しずつ増やしていくには、意識を高めるとともに、地域住民の智恵と柔軟性ある制度の整備が求められているように伺えました。



水車と発電機]水流は円筒の中を右から流れ中のプロペラ水車を回す。水車の回転がベルトで発電機(左の上)を駆動する。↑

下内野自治会

大東町内にある農家レストラン「おふくろ」で伝統食のすいとん定食を楽しみ、13時半頃予定通り「下内野自治会」に到着しました。当自治会は昨年度、「第20回農民俗文化賞」を受賞したことから、参加者と幾分馴染んだ関係にもあります。



小山事務局長(正面)による座学

小山隆人事務局長および自治会の役員 5 名が迎えてくれました。小山事務局長は「かじかの里下内野」をテーマに自治会の受賞にいたる取り組みを中心に概要を説明していただきました。自治会の名称になったのは平成元年のことで、自治会を一つの集落として理解してよいでしょう。日本の多くの中山間地域と同様に、過疎化と高齢化が深刻に進んでいる地域でもあります。集落住民の人数が平成 16 年の 148 人から平成 22 年の 122 名と 26 名も減少しており、平成 22 年時点では 65 歳以上の高齢者の人数が 49 名で、集落全体の 40% の割合をも占めています。

そのような厳しい現実のなかで、下内野自治会は 2007 年に 10 年後にむけて、4WD の計画による「かじかの里」づくりの目標を掲げ、取り組んできています。4 は老若男女つまり集落全員のことで、W とは Water つまり水のこと、D は Dream つまり夢のことです。4WD とは集落全員の方で清流砂鉄川の水の資源を活かしながら、地域づくりの夢、という意味合いが込められたネーミングとして解釈できます。「定住人口の倍増」、「交流の拡大」、「住環境の充実」と「産業の振興」といった 4 つの車輪を動かすために、自治会員がドライバ役に、その助手席に明日を担う青少年をも乗せて、ともに「カジカの里」づくりの夢を実現していこうということです。「カジカの里」を計画のタイトルにされたのは、この集落の水質保全の取り組みに関連しています。

下内野自治会は、清流砂鉄川の源流に位置しており、平成 6 年に日本大学との交流から「石磨き大会」を開催するようになり、その後「かじか」が棲めるようになりました。石磨きとは、具体的には、自治会会員、地元の小中学生、日本大学の学生が川に入り、川の石を古縄たわしで磨くことです。その活動が現在にも継続され、平成 24 年で 19 回を迎えました。「石磨き大会」開催期間中、食事の準備などで実際の活動に参加できない女性たちにもぜひ参加してもらいたいなど、活動の内容の充実が今後の課題となっています。

清流の保全とともに、住環境の質を高めることも目標に含まれています。それに向けて、全世帯宅地分譲事業も行われ、自治会員がそれぞれ未利用の農地を出し合い、地域づくりの仲間として定住者を受け入れるという事業です。現時点では、千葉や神奈川、名古屋などから 4 世帯が移住し、なかにしたけ栽培に力を入れる事例も現れています。



有機圃場の視察

自治会は、日本大学の学生と教員とのいわゆる都市農村間の交流に留まらず、中国の遼寧省桓仁県桓仁鎮（りょうねい省こうにん県こうにんちん）との国際交流も平成12年に始まり、10年が経過しています。相互訪問が3回ずつ、転作作物として中国の薬草栽培への取り組みも模索されています。

下内野自治会のもう一つ注目されるべき活動として、集落全戸の積み立てによって会館を建設したことです。この会館は交流に来る学生たちの宿泊施設のほか、田植え踊りの伝承保存事業の場としても活かされ、将来、高齢者の冬場の共同生活の場にしようとする構想も盛り込まれています。それが実現できたら、地域の力で協力して高齢者のケアをする、という新しい道が開けるのではないかと、期待を与えてくれたアイデアだと評価したい。

劉文静(岩手農民大学常任運営委員・岩手県立大学准教授)

運営委員会だより

2012年度第2回運営委員会の報告

◇8月25日に開催。渡辺学長はじめ13名出席。

◇次ことを承認しました。

- ・「北海道農民管弦楽団」花巻公演（来年1月23日）を後援する。
- ・「農を変えたい東北集会 in いわて」（来年年2月2～3日花巻温泉を予定）の実行委員会に参加する。
- ・「ドイツの脱原発・再生可能エネルギーから学ぶ講演会・シンポジウムを成功させる実行委員会」に参加する。
- ・岩手県農協労組の大会で新委員長に齊藤禎弘さんが新任されました。そのことにより同労組選出の運営委員として同氏を承認しました。

◇「第26回米と日本民族の未来を見つめるシンポジウム」の概要確定

日時と会場

12月1日（土）午後～ 一関市内

テーマ

原発放射能汚染とたたかう農民

内容

基調報告～福島県の農民の実践一菅野正寿さん（ふくしま有機ネット理事長）

報告～岩手の畜産酪農・しいたけ栽培農民、農協担当者などを検討

※以上のことを決め、岩手の報告者や詳細については常任運営委員会に一任としました。